

ロボット搾乳における蹄浴

ドルテ・ドッファー先生のおしえ

かやの

はじめに

今年3月にウィスコンシン大学の蹄管理のスペシャリストかつ疫学者のドルテ・ドッファー先生が来日され、私も大変刺激を受けました。タイトルでは「ロボット搾乳における蹄浴」としましたが、ロボットに限らず、個人的にビビッときたドルテ先生のコメントをいくつかピックアップしてここで共有したいと思います。

フットバスの交換頻度や濃度をチェック

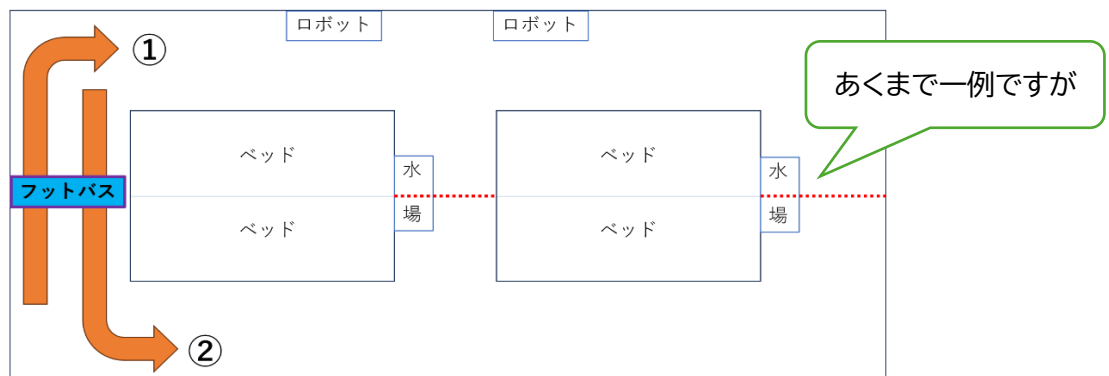
当然のことなのになかなか難しいのが、適切なフットバスの交換頻度です。ポイントは牛群のDD割合がどうなっているか。つまり、**モニタリング（普段牛群にどれくらいのDDがいるのかといった定期的な情報）が重要**となってきます。いままで数パーセントであったのが、急に増えてきたというトレンドがわかれば、DDが蔓延している可能性があります。その際にチェックすべきは**フットバスの交換頻度と濃度**です。あくまで目安ですが、硫酸銅であれば2%、ホルマリンであれば3%程度の濃度が良いとされています。一方で、除糞を適切に行わなければ蹄は常に汚く、蹄浴の効果はもちろん半減してしまうでしょう。

たとえば、その濃度で1日2回薬液を交換している牛群があったとします。その牛群でDDが増加傾向にあれば、交換頻度をあげることが必要かもしれません。**交換頻度が低いと薬液としての効果を失ってしまい、最悪の場合トリボネーマ（DDの原因細菌）感染を牛群内で拡げてしまう可能性**があります。

もし、牛群内ですでにDDが蔓延している状態（M2病変(前回5月号の富田くんのM情報を参考にしてください)が30%以上）であり、週に2回しか薬液を使用した蹄浴をしていないのであれば、週に連続して3回薬液フットバス（適切な濃度の硫酸銅等）を設置することが求められているかもしれません。

設置場所をチェック

ロボット搾乳をしている多くの農場では、フットバスは搾乳ロボットの出口に設置していると思います。しかしその場合、十分な長さを確保できないことも往々にしてあります。さらに、ロボットから出た直後に急な段差などがあると角質病変を誘発しかねませんし、適切な濃度を維持するために適度な薬液の交換が必要となってきます。理想を言えばキリがありませんが。最近だと蹄の自動洗浄も出ているそうです。ドルテ先生から提案していただいた現実的かつ効果的なひとつの提案は、下図のようなものです。



赤の点線でゲートをして、①、②のように**牛群の全頭を強制的にフットバスに通す**という方法です（往復させるので、2回四肢が浸かる）。それを1日2回（2往復）実施する。この方法の良いところは、一気に全頭通すので、薬液が薄まりにくく、放置する場合よりも適切な濃度が維持されやすいということです。また、ウシを追う際に走らせるのではなく**ゆっくりと追う**ことも忘れてはいけないポイントです。

データをとることが大事！！

先生が何度も強調していたのは、**データの重要性**です。牛群にどれだけDDがいるのか、それは先月や去年と比べて多いのか少ないのか、こうした「トレンド」はデータを定期的にまとめていくことでわかります。そうでなければ、そもそもフットバスの効果について判定さえも難しいからです。